

明治四十年四月一日創刊 令和五年五月一日 通巻第一、三九五号 (毎月一回発行)

和歌新万葉

武島羽衣題簽

札幌興風会
會長 間島 誉史秀

北海道神宮献詠 五月兼題 「飲む」

深きよりやはらかきいのちの湧きこよと春の朝の水を飲みゆく

昼下がり舌を使ひて水を飲む猫のしぐさのあはれなるかな

夏の盛り汗を流せる畑に座り赤紫蘇ジュース飲むのを潤すと

頭痛く出勤前に痛み止めを戯言と飲む「行きたくない」の

生まれ来てまだ見えぬまま母乳飲む赤子の姿に生きるを見たり

旅人を船もろともに飲みこめる知床の海春まだ哀し

風邪の吾子よ三十九度はつらからうとスプーンで飲ませりシロップ菓を

グラス並べワインを注ぎてひとり飲むひとつは夫が遺影に供へ

ちる花は芋のうね間に飲まれゐて白波のごとく泡立ちてをり

弁慶の立往生に息を呑む教室は今平泉に飛びぬ (大河ドラマ『義経』鑑賞)

米寿過ぎ抹茶以外は受け付けず飲物拒否の末が恐ろし

村田俊秋先生選

選者 村田 俊秋

会長 間島 誉史秀

天位 八尾師 絹子

地位 岩間 亜有加

人位 鎌田 憲子

秀逸 後藤 優美子

秀逸 遠田 信之

秀逸 梶谷 久寿美

佳調 大桃 小やゑ

佳調 信田 日裕

佳調 加藤 紀恵子

時をりに自分にごほうび飲むお酒神宮梅酒品良く味良し

大湯廣子

森の中を母と一緒に散歩して小川の水を飲むそのうまさよ

小川紫織

酒飲みの患ふ友に宴席でそと差し出だすノンアルコール

門前和幸

ファミレスで一歳半の孫が目を丸くす初めて飲んだイチゴミルクに

中島正倫

飲む飲まぬ飲まぬと決めて帰宅すれど開ければ揺らぐビールの誘惑

小野勇人

朝食後おひるごはんに夕食後追はれるごとく飲む薬あり

室岡和子

乾きゐるを喉が知らせて水を飲む風邪をひかぬと心に期して

宮城涼

夕餉の後出されたお茶が美味しくて母を見やれば「いい茶葉だからね」と（帰省時）

片石辰弥

ちくちくと注意をするは親心為にならぬかと二の句飲み込む

楽間直之

飲み薬「ポパイになれる」と言ふママに半信半疑に子は飲みこめり

原里子

ひとしきり泣きたる吾が児が母の乳を飲めば飲むほどめぐしうつくし

吉良忠誠

一口目は香りを楽しみ二口目苦味と酸味を舌で測りぬ

南貴子

総評

天位（八尾師絹子）

季節、場、動きなどが具体的に歌われている。汗を流したあと、畑の上に座つての赤紫蘇ジュース。「どを潤すと」の結句が、それまでの描写を、しっかりと受けとめている。

地位（岩間亜有加）

このようなことは誰にでもあるだろう。それだけに読者を納得させる。出勤前の頭痛。「行きたくないなあ」との思いがある。それを戯言として痛み止めと一緒に飲み下しているのだ。この位の痛さで休めないぞ、の自分へのけしかけでもあるだろう。

人位（鎌田 憲子）

身近の人に、この光景を見たのである。「生きる」ことなど考えもしない赤子が、ひたすらに母の乳を飲む。この姿に「生きる」力を見たのである。生きるための力を目の前にしての感動からの一首。

秀逸（後藤優美子）

知床観光船の事故は記憶に新しい。驚きと悲しみを「春まだ哀し」に詠み込んでいる。この「まだ」に、遭難事故が、関係者のみならず、多くの人に打撃と悲しみを、今、なお与え続けていることを示している。

秀逸（遠田 信之）

三十九度は高熱だ。しかも小さい子供。三歳と聞いているが、呼吸の荒くなっている吾子に、シロップの薬をスプーンで飲ませているのである。父親としての子への深い思いが伝わってくる。

秀逸（梶谷久寿美）

ワインを夫と共に、曾ては飲んでいたのである。「今日は」というよりも「今日も」二つのグラスにワインを注ぎ、夫の写真の一つを供えているのである。「ひとり飲む」とあるが、心の中では二人で飲んでいるのだ。悲しみを伴う一首。

佳調（大桃小やゑ）

小さな畑を家の近くに持っているであろう。芋の畝の間に桜の花が散っている。畝が高いので、「飲まれぬて」の表現となり、更に多くが散っているので、その様を「白波のごとく泡立ちてをり」と歌っているのである。大胆に詠んでいる。

佳調（信田 日裕）

教室で大河ドラマの『義経』を鑑賞したと詞書にある。この場面は能や歌舞伎に扱われている有名なところ。「息を呑む」「平泉に飛びぬ」にドラマに引き込まれている生徒の姿や思いを見せてくれている。

佳調（加藤紀恵子）

米寿を過ぎた作者。抹茶以外は口にしないという。からだを受け付けないらしい。そうした自分に、他のものを飲まなくても大丈夫だろうか、ふと不安がよぎっているのである。不安を抱いている立場からの作品。

札幌興風会 五月兼題(一) 「沼」

村田俊秋先生選

沼宮内をスマホで検索歴史知る数多の想ひ出のふるさと岩手

天位 大 濁 廣 子

評 沼宮内は北上川上流に位置する町。スマホで検索したというから、縄文式遺跡や奥羽街道の宿駅であったことを知つての一首であろう。作者のふるさとであるのだ。歴史的なものを多く持つこの沼宮内や、広く岩手を懐かしく思い出しているのだ。

幼き日沼の藻を引き菱ひしの実を初めて見たる日今も忘れず

地位 室 岡 和 子

評 素直に事実を歌い、また、今の気持ちを読み込み、読者を引き入れてくれる。幼い日に、菱の実を取つたのだ。菱の実は固い。初めて目にし、手に触れての感触を今でも忘れられないのだ。沼のこと、藻のことも思い出しているのだ。

白鳥に差し出せる手を囁まれたり沼の岸から我を睨みて

人位 南 貴 子

評 近くにある沼を訪ねたのであろう。そこにいる白鳥。その姿の美しさに、つい、手を差し出したという。いきなり手を囁まれたのだ。しかも、白鳥は危険と感じたのか、岸から睨みつけたのだ。警戒心の表れだろう。びっくりしましたの一首。

噴石で堰き止められてできた沼今朝はのどかに大沼だんご

秀逸 後 藤 優美子

独り推す幸せは人を指すと言ふ「沼にはまる」は照れか自嘲か

秀逸 小 野 勇 人

好きな物を表す語として言ひ得て妙と思ふ我もまた「沼」の住人

秀逸 岩 間 亜有加

自転車で友と旅せし兜沼かぶねま忘れ難きはカラス貝の美味（昭和の稚内）

佳調 信田 日裕

沼に生ふるガマの穂引き抜き遊ぶ吾子またいききたいなと布団でつぶやく

佳調 遠田 信之

若者よスマホ便利と悔るな詐欺の泥沼潜みゐるかも

佳調 梶谷 久寿美

グズグズと沼辺を歩く気分の日を抜け出るまでは辛抱の時

宮城 涼

雪解けの進まぬうちにと友の後をしつかりつきゆく沼の端の辺へを（中空知の沼）

原 里子

青沼の不思議なブルー立ち枯れたる木達「おいで」と手まねきをする

加藤 紀恵子

暑い日に思ひ出すのは小六の友は沼にて溺れ亡くなりし

八尾師 絹子

札幌興風会 五月兼題(二) 「額（ひたひ）」

村田俊秋先生選

将来の夢は美容師と女孫いふ額の髪をかき上げながら

天位 八尾師 絹子

評 将来の夢は美容師と語る女孫。子供と置いていたのに、少しばかり大人びた様子を「額の髪をかき上げながら」に捉えている。孫と一緒に孫の夢を描く作者である。

クラブ投げ額の汗吸ふ帽子投げでも愛される野球小僧よ

地位 小野 勇人

評 WBCで優勝した時の大谷翔平投手の、動的な場面を一瞬、切りとつての作。あの時のクラブ、帽子を投げける仕草、雄叫び。強敵アメリカを力尽で倒しての汗を作者は感じとっている。だから「野球小僧よ」の強い詠嘆と呼びかけが生きてくる。大谷選手の野球へのひたむきさ、純粹さへの詠嘆。

熱の出で豆腐パスタを額ぬかにはりし三歳の孫は今二十八

人位 大 瀧 廣 子

評 熱さましに、こんなことをするのだということを知った。それつ、熱さましだと言って、孫の額に豆腐パスタを張りつける。作者は必死。そばにいる者は何とも滑稽。その孫も今は二十八歳。豆腐パスタゆえの成長。いいね！を連発している作品。

生えぎはの額の汗を拭ぐひつつ夫を看取りぬ葉月の終り

秀逸 室 岡 和 子

前髪が額を覆ひ目も隠れそれが良いらし思春期の吾子

秀逸 南 貴 子

園児らが額を集め真剣に通訳なしで会談して

秀逸 後 藤 優 美 子

「この額頭も良い」と小三の男先生の言葉なつかし

佳調 加 藤 紀 恵 子

熱の有無を額と額を合はせみて「大丈夫だよ」が家族の安心

佳調 原 里 子

伸びた髪額にかかり手で払ふ散髪要らぬと一日延ばしに

佳調 宮 城 涼

治れると思ふに額に傷のありやんちやな三歳公園に行く

遠 田 信 之

転倒の額の傷の痛いたし眼鏡で秘すると妹言へど

梶 谷 久 寿 美

生徒たちが額を集め考へし案は原石本時磨かむ（担任時代・学校祭を前に）

信 田 日 裕

前髪を上げた額にファンデーション息苦しくて化粧は苦手

岩 間 亜 有 加

札幌興風会 五月兼題(三) 「雑詠」

村田俊秋先生選

歩行器にすがりて一歩また一歩歩む妹の姿見守る

天位 梶谷久寿美

初登園吾子は笑顔でバスに乗る見えなくなるまで妻と見送る(幼稚園の送迎バス)

地位 遠田信之

街中へ向かふバス通は苦にならぬと田舎嫌ひの吾子の言ふこと

人位 南貴子

桜見る夫婦に連れられ老犬のお散歩時間いつもより長し

秀逸 小野勇人

限りなく大空自由に雲流れ風の筆先休む間もなく

秀逸 鎌田憲子

入院の友に見せたく日参す桜のつぼみは明日よと笑ふ(サイクリングロード)

秀逸 重川啓子

卯月中黄砂や雪のふる庭に紫つつじけなげにも咲く

佳調 室岡和子

友の死を知る春の朝に雪の降る時代の終りか思ひは駆ける

佳調 宮城涼

北海道開拓者の思ひ忘れじと記念塔にて感謝をしるす

佳調 八尾師絹子

黒猫のひとみの深みどりがやきて生きた寶石我が家に二匹

加藤 紀恵子

一人ひとり個性を發揮目標の優勝達成侍ジャパン

大瀧 廣子

同じものを何故何回もと聞かれても「好きだから」としか答へようがなし(映画館へ通う)

岩間 亜有加

ベランダに春一番の贈りもの風とあそべる桜のはな花

原 里子

会のたより

●四月二十日(木)十時、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行されました。その後、慶陽館二階あすなるの間に十一時から歌会を行いました。

【出席者】村田先生、大湯、鎌田、窪田、八尾師各会員、事務局の中島、遠田各権禰宜の以上七名。

●御誕生祝の短冊を贈呈

四月誕生者の原里子様へ御誕生祝の短冊を郵送致しました。宮城涼様には後日お渡しさせて頂きます。茲にお祝い申し上げ、更なるご健勝を御祈念申し上げます。

●入会者ご紹介

窪田 明美(くぼたあけみ)様
札幌市中央区の在住。大湯会員のご紹介です。今後とも未永く宜しくお願ひ致します。

「札幌興風会」入会のご案内

札幌興風会は、明治四十年(一九〇七)四月、当時の札幌神社(現北海道神宮)宮司の額賀大直の頃に始められた歌会で、札幌の短歌結社の草分け的存在であります。月例の歌会は北海道神宮頓宮や札幌市内の各所で催されていますが、昭和五十年(一九七五)一月から北海道神宮社務所で催すこととなり、毎月二十日の旬祭にあわせて献詠祭を斎行し、引き続き月例の歌会を行っています。毎月会報『和歌新萬葉』を発行しています。

歴代の点者(ご指導頂いている先生)は、宮中御歌所参候、小杉榎軒を初代として、御

歌所寄人の阪正臣、千葉胤明、遠山英一、鳥野幸次、武島羽衣また岡野弘彦といった方々が務め現在は十四代目の点者、村田俊秋先生にご指導賜っており、平成十九年四月に創立百年を迎えました。

毎月二十日の旬祭並びに献詠祭では秀歌三首を天・地・人位として大前に和歌を奉納し、記念に特製の短冊を贈呈しています。歌会また勉強会では、初心者にも分かりやすいように作品鑑賞、添削、指導を行っております。

現在の会員は四十名で、二十代から九十代の方までおります。どなたでも入会ができて見学も自由です。『古事記』『万葉集』の頃より続き日本人に愛されてきた伝統文化、短歌に興味のある方、作ってみたい方の入会を心よりお待ちしております。

一、場所 札幌市中央区宮ヶ丘四七四

北海道神宮社務所

一、開催 毎月二十日

午前十時より旬祭並献詠祭(本殿)

午前十一時より歌会(慶陽館・あすなるの間)

正午より短歌勉強会(慶陽館・あすなるの間)

一、月会費 三千元(うち玉串料千円)

※初回の会費不要。出席されず詠草提出のみの方、遠方にお住まいの方、学生の方は応相談。

一、その他

①毎月二十日、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行され、天地人位の秀歌三首に選ばれた方に特製の短冊を差し上げていま

す。また、その月に誕生日を迎える方にも別にお祝いの記念品を贈呈しています。
②毎月会報「和歌新萬葉」を発行し、会員の皆様からお寄せ頂きました短歌を掲載致します。定期的に歌集「興風」を発刊致します。
③遠方にお住まいの方も歓迎致します。出詠頂きました短歌を添削し会報と共に郵送致します。
④会員相互の親睦を図るため、新年会、観桜会、観楓会、忘年会等を開催しています。

お申し込み・お問い合わせ

札幌興風会事務局 TEL〇二一六二一〇二六二
担当 北海道神宮教化部 遠田(とこだ)

令和五年六月兼題

一、北海道神宮献詠 「広ぐ」

二、札幌興風会兼題 (一)「砂」

〃〃 (二)「舗道」

〃〃 (三)「雑詠」

※締切り 五月二十五日(木)必着

三、明治神宮献詠 「雨」

※未発表歌厳守。締切は毎月十日ですのでご注意ください。
所定の様式にて各自の発送となります。

〒〇六四・八五〇五
札幌市中央区宮ヶ丘四七四番地北海道神宮社務所内
札幌興風会事務局

電話 〇二一六二一〇二六二
電 話 〇二一六二一〇二六二
発行人 間 島 誉史秀
編集人 遠 田 信 之
印刷人 白馬堂印刷(株)